まつられた神格とそれらの位置からみたインド・ホイサラ寺院の
類型学的考察A TYPOLOGICAL STUDY ON THE HOYSALA TEMPLES IN TERMS
OF ENSHRINED DEITIES' TYPES AND LOCATIONS

矢口直道*

Naomichi YAGUCHI

This study aims to clarify the relations of the deities enshrined and their locations in the *Hoysala* temples. While the main deity is usually located at the west side of the *navaranga* to face the entrance at the east and other deities are located symmetrically at the sides of the *navaranga*, the deities are enshrined asymmetrically in some temples. It is conceived that the temple plan and the locations of the deities tend to be symmetrically composed in the *Jain* and the *Vaisnava* temples. Among the *Saiva* and the syncretic temples with *Siva* and *Visnu*, the main deity is located to the west and the entrance to the south.

Keywords ; Indian Architecture, Hoysalas, Saiva, Vaisnava, Jain
インド建築, ホイサラ朝, シヴァ派, ヴィシュヌ派, ジャイナ教

1. はじめに

本論は、南インド・カルナータカ州南部に11世紀から14世紀にかけて栄えたホイサラ朝の時代に建立された寺院（以下、ホイサラ寺院）について、それらの平面を類型化するとともに、そこにまつられた神格の種別と位置、及び寺院の本殿入口との相関について整理し、ホイサラ寺院において特異な構成を考察するものである。ホイサラ寺院では、シヴァ神をまつる寺院（以下シヴァ寺院）、ヴィシュヌ神をまつる寺院（以下ヴィシュヌ寺院）、ジャイナ教の神々をまつる寺院（以下、ジャイナ教寺院）が多く、一つの寺院に複数の神格がそれぞれのガルバグリハ（祠堂）の中にまつられることもある^{注1}。またホイサラ寺院では、シヴァ神、ヴィシュヌ神の他にスーリヤ神、マヒシャースラマルディニ神（シヴァ神の妃）等の異種の神格をまつる重層信仰の寺院（以下重層信仰寺院）もある^{注2}。シヴァ神、ヴィシュヌ神をまつる寺院が最も多い。インドの中世寺院では、西に一つの主神をおき、東から寺院に入るものが多くみられるが、ホイサラ寺院における主神の位置に関してはこうした方位に加え入口との相関が重要な要因になっている。

デル・ボンタは、一つの寺院にガルバグリハが二つあるドヴィクータ型寺院と、三つあるトリクータ型寺院を宗派別に分けて整理している^{注3}。シェッターはドヴィクータ型寺院と、トリクータ型寺院

を、シヴァ派、ヴィシュヌ派、重層信仰に分けてガルバグリハと入口の位置によって分類し、事例の特徴を述べているが、総括的な見方が示されている訳ではない^{注4}。これらの研究は主としてドヴィクータ、トリクータという祠堂の数による分類に基づいており、宗派と寺院平面の関係の考察が十分ではないと思われる。

マイソール考古局年次報告書（以下MAR）^{注5}には、崩壊しているものも含めて460基以上のホイサラ寺院が記載され、またシェッターも427基を挙げているが^{注6}、本稿では寺院平面の構成、入口の位置等がMARに記述され、さらにまつられた神格が明らかな238基の寺院を扱う。

ホイサラ寺院は、主にガルバグリハ（祠堂）、シュカナースイ（前室）、ナヴァランガ（拝殿）、ポルティコによって構成されている^{注7}、これらの組み合わせによって様々な平面が形成されている^{注8}。本稿では寺院を構成しているこれらの諸室が主神をまつるガルバグリハに向う軸線に沿って対称に配置されているかどうかによって、線対称の寺院と非対称の寺院に大きく分けて考える。線対称の寺院には、ガルバグリハ、シュカナースイ、ナヴァランガ等が一軸線上に配置される寺院（一軸対称／図1）、主神をまつるガルバグリハに加えてナヴァランガの左右に、さらにガルバグリハまたはポルティコが配置される寺院（二軸対称／図2、図6）、ガルバグリハ、シュ

* 名古屋大学大学院工学研究科建築学専攻 大学院生・工修

Graduate Student, Dept. of Architecture, School of Engineering, Nagoya University, M. Eng.

カナースイ、ナヴァランガが並置された寺院（一軸対称の並置／図5）がみられる。本稿では上記の宗派別にこれらの一軸対称、二軸対称、並置、非対称の平面類型について考察する。

II. 宗教的背景

まず、当時の宗教的背景について概観する。

ホイサラ朝の時代のカルナータカ州南部では、ヒンドゥー教のシヴァ派、ヴィシュヌ派、そしてジャイナ教が広く信仰されていた。シヴァ派は、ホイサラ朝の時代にはカーラムカ(Kalamukha)とカーパーリカ(Kapalika)の二つの分派が影響力があったが、1世紀以降カーラムカの苦行僧がカルナータカに住んだ形跡があり、ホイサラ朝以前から影響力があったものと考えられる^{注9}。ヴィシュヌ派は北カルナータカでは盛んだったが、南カルナータカではラーマヌジャがタミール地方から逃れてきたことが契機となって信仰が広まったものと考えられている^{注10}。ラーマヌジャは、従来のウパニシャッドのような哲学、あるいは儀式中心の祭式主義とは異なる、バクティ（信愛に基づく神への絶対的帰依）の概念を体系化した最初の哲学者、宗教家であるといわれ、ホイサラ朝の下で展開したヴィシュヌ信仰に強く影響を与えた人物である^{注11}。ラーマヌジャは、12世紀初頭にはタミール地方からホイサラ領に達していたものと考えられている^{注12}。当時のホイサラ王、ビッティ・デーヴァがジャイナ教からヒンドゥー教ヴィシュヌ派に改宗し、名前もヴィシュヌヴァルダナに改名したという伝説は広く知られている。南カルナータカではガンガ朝以来の伝統があるジャイナ教は、12世紀初頭にその絶頂期を迎えるが、シヴァ派、ヴィシュヌ派の台頭によって、勢力が衰えた^{注13}。

ホイサラ寺院は、その外壁のレリーフ等に彫刻家、または建築家の名前が刻文として残っていることがあり、コッリヤーの研究によって、彼らの宗派が判明している^{注14}。それによると、カーラムカが彼らの多くが活動していた地域で隆盛だったので、この宗派に属する人々が宗派を越えて寺院の建立にたずさわっていたことがわかる。またヴィシュヌ派の彫刻家の刻文は一例が判明しているのみであり、ヴィシュヌ寺院にのみ見られる。ジャイナ教徒の彫刻家の刻文は、主としてジャイナ教寺院に限られる^{注15}。一方、寺院を建立するパトロンは、本人の宗派とは関係なく異なる宗派の寺院を建立していることもあり^{注16}、宗教的には比較的自由に芸術活動が行われていたものと推察される。

III. 宗派・神格別分類

宗派・神格別の寺院建立数をみると（表I）、シヴァ神のみ、ヴィ

表I. 宗派・神格別の寺院建立数

宗教、宗派		11世紀	12世紀	13世紀	14世紀	不明	計
ヒンドゥー教	シヴァ派	2	24	31	2	26	85
	ヴィシュヌ派	-	30	28	5	19	82
	重層信仰	4	13	13	-	9	39
	その他	-	1	-	-	2	3
ジャイナ教		-	26	-	1	2	29
計		6	94	72	8	58	238

シュヌ神のみをまつる寺院が多く、次いで、重層信仰寺院、ジャイナ教寺院の順となっている。シヴァ神またはヴィシュヌ神をまつる寺院が12世紀から13世紀にかけて多く建立されるのに対し、ジャイナ教寺院は主に12世紀に建立されている。なお、シヴァ神、ヴィシュヌ神以外のヒンドゥー教の神格を単独でまつる寺院が3基あるが^{注17}、これらはすべて、ナヴァランガの西側にガルバグリハ、東側に入口が位置する一軸対称平面の寺院である。

III-1. シヴァ寺院

シヴァ寺院の平面について、ナヴァランガを中心としてガルバグリハ、シュカナースイ、寺院の本殿入口が、どの方位に配されているのかを表IIに示す（以下、表III、IV、Vについても同様）。シヴァ寺院ではガルバグリハにまつられる偶像はリングであることが一般的で図像的に区別することは難しいが^{注18}、チットゥールのラーマナーテーシュヴァラ寺院^{注19}（図1）のようなナヴァランガの東側に入口があり、西側にガルバグリハが位置している一軸対称平面が最も多く、配置は同じであるが入口の方向が異なる寺院がわずかながらみられる。ハールナハッリのソーメーシュヴァラ寺院^{注20}（図2）のように、ナヴァランガの一方にシュカナースイ、ガルバグリハが位置し、その他の三方に入口が位置する寺院がある一方で、本殿入口をのぞく三方にガルバグリハが位置し、入口から主ガルバグリハに向う軸線について対称に位置する二軸対称寺院（図6に準ずる）がみられる。

トゥルヴェーケーレーのサンカレーシュヴァラ寺院^{注21}（図3）のように、ナヴァランガの南側に入口があり、西側にガルバグリハ、シュカナースイが位置する非対称の寺院もみられる。ヌグギーハッリのサダーシヴァ寺院^{注22}（図4）は、ナヴァランガの西側にガルバグリハ、東、南側に入口が位置し、東側の入口はナンディー堂につながっている。この寺院は、後に寺院の南側に多くの附属建物がある

表II. シヴァ寺院

	ガルバグリハ	シュカナースイ	本殿入口	寺院数	
一軸対称	西	西	東	44	48
	北	北	南	1	
	東	東	西	1	
	南	南	北	2	
二軸対称	西	西	北、東、南	5	11
	南	南	西、北、東	1	
	西*、北、南	西	東	2	
	西*、北、南	西、北、南	東	1	
	西、北*、東	西、北、東	南	2	
並置	西(2)	西	東	5	8
	西(3)	西	東	1	
	西(5)	西	東	2	
非対称	西	西	南	12	18
	西	西	北、東	1	
	西	西	東、南	5	

(注)「ガルバグリハ」欄の「*」は複数のガルバグリハがある寺院のうち主ガルバグリハの位置を示す。カッコ内の数字は並置されたガルバグリハの数を示す。「ガルバグリハ」「シュカナースイ」「本殿入口」欄にはナヴァランガに対する位置を示す（以下、表III、IV、Vについても同様）。

図1. シヴァ寺院（一軸対称）の例。ラーマナーテシュヴァラ寺院，チットール。（MAR 1928 Pl. V. をもとに筆者作成。以下の図も同様。）

図2. シヴァ寺院（二軸対称）の例。ソーメーシュヴァラ寺院，ハールナハリ。（MAR 1933 Pl. XV.）

図3. シヴァ寺院（非対称）の例。サンカレーシュヴァラ寺院，トゥルヴェーケーレー。（MAR 1934 Pl. XIX.）

図4. シヴァ寺院（非対称）の例。サダーシヴァ寺院，ヌグギーハリ。（MAR 1917 Pl. IV.）

図5. シヴァ寺院（一軸対称の並置）の例。サンガメーシュヴァラ寺院，スィンダガッタ。（MAR 1920 Pl. XIV.）

図6. ヴィシュヌ寺院（二軸対称）の例。ラクシュミーナーヤナ寺院，アダグル。（MAR 1942 Pl. XVII.）

増築され、現在は南北に長くなっている。ガルバグリハの正面ではない南側に入口のある寺院ではこの方向に拝殿等が展開していく可能性があり、サダーシヴァ寺院のようにこの南側の入口を本殿の主たる入口としてとらえることが可能であろうと思われる。またスィンダガッタのサンガメーシュヴァラ寺院^{註23}（図5）のように、ガルバグリハ、シュカナースイ、ナヴァランガ、入口のポルティコが並置され、ナヴァランガでつながったような寺院もある。

ヴィシュヌ寺院に比べ非対称平面の寺院が多く、またスィンダガッタの寺院のように一軸対称平面が並置されナヴァランガを共有するものはシヴァ神のみをまつる寺院にしか見られない。

III-2. ヴィシュヌ寺院

ヴィシュヌ寺院では、ヴィシュヌ神が10のアヴァターラ（化身）の他にも、24のヴィシュヌ・ムールティ（顕現）など神話に基づいて様々な名前と呼ばれ、それぞれが彫像で表現される。ホイサラ寺院では、ヴェーヌゴーパーラ（クリシュナ）、ケーシャヴァ、ナーラーヤナ、ナラシンハがまつられることが多い。ヴェーヌゴーパーラは単独では2基の寺院にしかまつられていない^{註24}、その他のヴィシュヌムールティと組合わせてまつられるときには、入口に入って左側のガルバグリハにまつられる。入口正面の主ガルバグリハには、その寺院の名称と同じアヴァターラまたはヴィシュヌ・ムールティがまつられることが多い^{註25}（表Ⅷ）。

ここにもシヴァ寺院同様、ナヴァランガの一方に入口があり、その反対側にのみガルバグリハが位置する一軸対称平面の寺院が多数

を占める。ガルバグリハがナヴァランガの西側に位置する寺院がほとんどであるがガルバグリハが北側に位置する寺院もわずかながらみられる。入口の正面、左右にガルバグリハが位置し、左右対称となる二軸対称平面の寺院のうち、アダグルのラクシュミーナーラーヤナ寺院^{註26}（図6）のように、入口正面の主神をまつるガルバグ

表Ⅲ. ヴィシュヌ寺院

	ガルバグリハ	シュカナースイ	本殿入口	寺院数	
一軸対称	西	西	東	52	55
	南	南	北	3	
二軸対称	西	西	北、東、南	2	21
	東（K）	東	北、南	1	
	西*、北、南	なし	東	2	
	西*、北、南	西	東	11	
	西*、北、南	西、北、南	東	3	
	西*、北、南（V）	西、北、南	東	1	
	西、東、南*	南	北	1	
非対称	西	西	北、東	1	6
	西	西	東、南	3	
	西*、南	西	北、東	1	
	西*、南	西、南	東	1	

（注）（V）はヴェーラヴァーデーの寺院を、（K）はカイダラの寺院を示す。

図7. ヴィシュヌ寺院（非対称）の例。
ヨーガナラシンハ寺院，ナラシーブラ。
(MAR 1947-56 Pl. XIX.)

図8. ヴィシュヌ寺院（二軸対称）の例。
ヴィーラナーラーヤナ寺院，ベールヴァーディ。
(MAR 1923 Pl. XIX.)

図9. 重層信仰寺院（二軸対称）の例。プー
チャーシュヴァラ寺院，コーラヴァンガラ。
(MAR 1933 Pl. X.)

図10. 重層信仰寺院（二軸対称）の例。
ハリハレーシュヴァラ寺院，ハリハラ。
(MAR 1937 Pl. XIX.)

図11. 重層信仰寺院（二軸対称）の例。ラクシュミ
デーヴィー寺院，ドードガガッダヴァッリ。
(Narasimhachar, *The Laksmidevi Temple at
Dodda-Gaddavalli*, 1982, New Delhi [Rpt.] Pl. II.)

図12. 重層信仰寺院（一軸対称の並置）の例。
ナーゲーシュヴァラ寺院（図下），チェーンナ
ケーシャヴァ寺院（図上），モーサレー。
(MAR 1924 Pl. IV)

リハにのみシュカナースイが付随するものが最も多い^{注27}。

非対称平面はシヴァ寺院に比べて少ない。シヴァ寺院では入口の正面に必ずしもガルバグリハが位置するわけではないが、ヴィシュヌ寺院ではナラシーブラのヨーガナラシンハ寺院^{注28}（図7）のように、非対称平面でもナヴァランガの東側に入口があり、主たるガルバグリハはナヴァランガの西側で、入口正面に位置している^{注29}。ヴェーラヴァーディのヴィーラナーラーヤナ寺院^{注30}（図8）は、一軸対称寺院の東側に、南北にガルバグリハ、シュカナースイが位置するソーバマンダパと呼ばれる広間が増築されたもので、この平面を構成する寺院はホイサラ寺院の中では一つだけである^{注31}。またカイダラのチェーンナケーシャヴァ寺院は、ナヴァランガの東側にシュカナースイ、ガルバグリハが位置し、南、北側に入口が位置する特異な平面形をしている^{注32}。ヴィシュヌ寺院では、カイダラの一例をのぞいてすべてナヴァランガの主たる入口の正面に、主神をまつるガルバグリハがある。

III-3. 重層信仰寺院

重層信仰寺院では、主ガルバグリハにシヴァ神の象徴としてのリングを^{注33}、これ以外のガルバグリハにパンチャターナ^{注34}の神格のうちのいずれかをまつることが多い（表Ⅷ）。主ガルバグリハに向って右側にヴィシュヌ神をまつることが多いが、これ以外の神格もまつられる。

二軸対称平面の寺院（図6に準ずる）では、三つあるガルバグリハのうち中央に主神であるリングをまつり、左右にその他の神格を

まつる。一方、コーラヴァンガラのプーチャーシュヴァラ寺院^{注35}

（図9）は、ナヴァランガの西側にリングをまつるガルバグリハ、シュカナースイが、ナヴァランガの東側に、南北に入口があるマハーマンダパ（広間）が位置し、さらにその東側にスーリヤをまつるガルバグリハ、シュカナースイが位置する。ハリハラのハリハレーシュヴァラ寺院^{注36}（図10）は、ナヴァランガの西側にシュカナースイ、ガルバグリハが位置し、東側にはマハーマンダパがあり、これらは東西の一軸に沿っている。さらにナヴァランガの南側にも入口があり、北側にはボルティコを介してカーラバイラヴァをまつるガルバグリハが位置する。ドードガガッダヴァッリのラクシュミデーヴィー寺院^{注37}（図11）は、ナヴァランガの東、南、西側に、それぞれガルバグリハ、シュカナースイがあり、ラクシュミ、ヴィシュヌ、リングをまつる。さらに北側にもシュカナースイ、ガルバグリハが位置し、カーリー（シヴァ神の妃）をまつるが、このシュカナースイの両脇に入口が位置している。以上三つの寺院はそれぞれが特異な神格の配置をしていて、ホイサラ寺院には他に類例がない。

モーサレーのナーゲーシュヴァラ寺院とチェーンナケーシャヴァ寺院^{注38}（図12）、マラレーのシッデーシュヴァラ寺院とチェーンナケーシャヴァ寺院^{注39}は、それぞれ、リング、ケーシャヴァをまつる並置して建てられた寺院である。それぞれ東面して建てられたシヴァ寺院とヴィシュヌ寺院は、構造的には独立しているが、同時に、ほぼ同じ規模で近接して建てられているため、シヴァ神とヴィシュヌ神は対等であると信じていた人物によって建立されたもので

図13. 重層信仰寺院（非対称）の例。シャンブリンゲーシュヴァラ寺院，ケーレーサンター。（MAR 1945 Pl. XIII.）

図14. 重層信仰寺院の例（非対称）。ベーターシュヴァラ寺院，アグラハーラベルグディ。（MAR 1929 Pl. IV.）

あると考えられている^{注40}。

重層信仰寺院では、ケーレーサンターのシャンブリンゲーシュヴァラ寺院^{注41}（図13），アグラハーラベルグディのベーターシュヴァラ寺院^{注42}（図14）のようにナヴァランガの西側に主ガルバグリハが、南側に入口が位置する非対称の寺院が多い（表Ⅳ）。そのような寺院では、ナヴァランガの西側に位置する主ガルバグリハにはリングをまつり、北側にはヴィシュヌ神をまつるものが多い。そこでは西側の主ガルバグリハに正対して東側に入口が取られた例よりも、北側ヴィシュヌ神をまつるガルバグリハに正対して南側に入口が取られた例が多く見られる^{注43}。シェッターは、シヴァ神とヴィシュヌ神をまつるドヴィクータ型寺院（図14に準ずる）について、「このタイプを発想した動機は、明らかにシヴァ神、ヴィシュヌ神の同格性を確立し、この原理をかれらの守護神の優位を信じていた、または信じ込まされていた人々に浸透させることであった」^{注44}と述べている。このことはモーサレーのような並置された寺院でシヴァ神とヴィシュヌ神が同等に扱われていることから裏付けられよう。しかし、非対称平面の寺院ではシヴァ神とヴィシュヌ神のまつられた位置と入口の関係が同等とはいえず、この両神の間にヒエラルキーが考えられる。シヴァ信仰が盛んであったこの地方に、ラーマヌジャがタミール地方から逃れてきたことを契機にヴィシュヌ信仰が台頭してきた当時の社会背景を考えると、重層信仰寺院はヴィシュヌ神を入口正面におくことでまつりあげた形でヴィシュヌ信仰をシヴァ寺院に取込んだものとみなすことができる。このように考える

と、寺院の名称がシヴァ神にちなんだものがほとんどであること^{注45}（表Ⅸ），最も吉兆とされるナヴァランガ西側の主ガルバグリハに依然としてシヴァ神がまつられることが理解できる。また前述のシヴァ神のみをまつる非対称平面の寺院では、ナヴァランガの南側に入口、西側に主ガルバグリハが位置している寺院が多く、これと重層信仰寺院との関連性がうかがえる。

一方、ホイサラ朝のもとではアグラハーラと呼ばれるバラモン居留地が建設されている。例えばソーマナータブラ^{注46}では、村の中央部にヴィシュヌ寺院、村の周縁の南東、東北東にシヴァ寺院が建立されており、アグラハーラではそれぞれにシヴァ神、ヴィシュヌ神をまつる二つ以上の寺院が建立されることが多い。このことから重層信仰寺院の成立理由の一つとして、おそらく経済的理由で複数の寺院を建てることができずに一つの寺院に複数の異なる宗派の神格をまつるようになったことも考慮に入れる必要があろう。

Ⅲ－4. ジャイナ教寺院

ジャイナ教寺院は一軸対称平面か、二軸対称平面の寺院で、非対称平面の寺院はない（表Ⅴ）。ナヴァランガの東側に入口が、西側にガルバグリハが位置する一軸対称の寺院が最も多いが、ジャイナ教寺院の場合、ナヴァランガの北側に入口があり、南側にガルバグ

表Ⅳ. 重層信仰寺院

	ガルバグリハ	シュカナースイ	本殿入口	寺院数	
二軸対称	西*, 北, 南	西	東	5	12
	西*, 北, 南	西, 北, 南	東	3	
	西*, 北, 東	北	南	1	
	西*, 東 (K)	西, 東	北, 南	1	
	西*, 北 (H)	西	東, 南	1	
	西, 北, 東*, 南 (D)	西, 北, 東, 南	西, 東	1	
並置	西	西	東	2	2
非対称	西*, 北	西	東	4	25
	西*, 北	西	東, 南	2	
	西*, 北	西	南	3	
	西*, 北, 東	なし	南	2	
	西*, 北, 東	西	南	4	
	西*, 北, 東 (ナンディー)	西	南	2	
	西*, 北, 東	西, 東	南	1	
	西*, 北, 東	西, 北, 東	南	7	

（注）「（ナンディー）」はナヴァランガの東側にナンディーが置かれる寺院を指す。（K）はコーラヴァンガラ寺院，（H）はハリハラ寺院，（D）はドーダガッダヴァッリの寺院のいずれも例外的な寺院を示す。

表Ⅴ. ジャイナ教寺院

	ガルバグリハ	シュカナースイ	本殿入口	寺院数	
一軸対称	西	西	東	15	25
	南	南	北	10	
二軸対称	西*, 北, 南	西, 北, 南	東	1	4
	西, 北*, 東	西, 北, 東	南	1	
	西, 東, 南*	なし	北	1	
	西, 東, 南*	西, 東, 南	北	1	

リハが位置する寺院がヒンドゥー教寺院に比べて多い。これらの寺院には24人のティールタンカナ（祖師）、及び最初のティールタンカナであるアディナータの息子、バーフバリを加えた25祖師のうちのいずれかがまつられるが、ホイサラ寺院では、パールシュヴァナータ、アディナータ、シャーンティナータ、バーフバリがまつられることが多い。またヒンドゥー教の神格と同じ寺院にまつられることはない。

IV. 考察

まずはじめに、ホイサラ寺院にまつられた神格をまとめてみると、ジャイナ教寺院ではティールタンカナという比較的単純な神格がまつられているが、ヒンドゥー教寺院ではこれより複雑な組み合わせが見られる。シヴァ寺院ではリングがまつられるのみで変化に乏しいが、ヴィシュヌ寺院では、ケーシャヴァ、ナーラーヤナといったヴィシュヌの最高神格や、クリシュナ（ヴェーヌゴーパーラ）、ナラシンハなどのアヴァターラが多くまつられている^{注47}。また重層信仰寺院では、リングを主としてまつり、その他にヴィシュヌ、スーリヤ等、バンチャヤターナを構成する神格がまつられることが多い（表Ⅷ、Ⅸ）。

次にホイサラ寺院について、一軸対称、二軸対称等の平面類型と宗派別に寺院の建立数をまとめてみると（表Ⅵ）、他の王朝の寺院と同様に、ガルバグリハが一つあり、それに正対して入口が取られる一軸対称平面の寺院がそれぞれの宗派で大多数を占めている。ナヴァランガの東側に本殿入口が位置する寺院が一般的であるが、北側に位置するものがジャイナ教寺院に比較的多くみられる。二軸対称平面をみると、シヴァ寺院では入口が三つのもの（図2）とガルバグリハが三つのもの（図6に準ずる）に分けられるが、ヴィシュヌ寺院、重層信仰寺院、ジャイナ教寺院ではガルバグリハが三つのものが多い。一軸対称平面が並置される寺院は、シヴァ寺院、重層信仰寺院にみられるが、重層信仰寺院は個々の寺院が別棟であるのに対し（図12）、シヴァ寺院ではナヴァランガを共有し並置されている（図5）。非対称平面はヴィシュヌ寺院にもみられるが、ガルバグリハが一つのシヴァ寺院、複数の神格をまつる重層信仰寺院に多い。非対称平面のヴィシュヌ寺院では主ガルバグリハに正対して入口があり（図7）、主ガルバグリハと入口の関係は一軸対称平面に準ずるものと考えられる。これに対し、シヴァ寺院、重層信仰寺院ではナヴァランガの西側に主ガルバグリハが位置し、南側に入口があることが多く（図3、13）、ヴィシュヌ寺院とは性格が異なる。

ここでホイサラ寺院の特徴のひとつに挙げられる複数のガルバグリハがある場合を考える。同宗派の神格をまつる場合、シヴァ寺院では一軸対称平面が並置されるものが特徴的に見られ、ヴィシュヌ寺院、ジャイナ教寺院では二軸対称平面が多く用いられる。これに対し、異宗派の神格をまつる重層信仰寺院では非対称平面が多く用いられる傾向にある。平面の対称性に着目してみると、同宗派の神格をまつる場合に寺院の平面は対称に、異宗派の神格をまつる重層信仰寺院の場合に非対称になる傾向があり、同種の神格をまつる場合と異種の神格をまつる場合の建築表現の違いであると考えることができよう。

そこで異種の神格をまつる重層信仰寺院に比較的多く用いられる非対称平面がシヴァ寺院にもみられることに着目してみると、両者

ともナヴァランガ西側の主ガルバグリハにリングをまつり、南側に入口がある寺院（図3、13）が多い（表Ⅱ、Ⅳ）。ひるがえって、これらの寺院の建立年代を経年的に分類すると（表Ⅶ）、重層信仰寺院は、11世紀から13世紀にかけて建立されているのに対し、シヴァ寺院は、12世紀から14世紀にかけて建立されている。シヴァ寺院、重層信仰寺院とも12世紀から13世紀にかけて建立された寺院が多いので一概にはいえないが（表Ⅰ）、11世紀から建立が認められる重層信仰寺院の方がシヴァ寺院より早くから建立されていたとみることができる^{注48}。以上を勘案すると、重層信仰寺院では入口の正面にヴィシュヌ神をまつり、入口から向って左側に主神であるシヴァ神をまつることにより、神格のヒエラルキーを表現する非対称平面が発展し、それがシヴァ神のみをまつる非対称平面に影響を与えたと考えることができる。つまり、ホイサラ寺院で特異な非対称平面は、シヴァ信仰とヴィシュヌ信仰のヒエラルキカルな建築表現の追求の中から生み出されたものではないかと考えられるのである。

表Ⅵ. 宗派・神格別にみた平面類型

	シヴァ寺院	ヴィシュヌ寺院	重層信仰寺院	ジャイナ教寺院
一軸対称	48	55	-	25
二軸対称	11	21	12	4
並置	8	-	2	-
非対称	18	6	25	-

表Ⅶ. ナヴァランガの南側に本殿入口、西側に主ガルバグリハが位置する非対称平面の寺院

	11世紀	12世紀	13世紀	14世紀	不明	計
シヴァ寺院	-	3	7	1	6	17
重層信仰寺院	4	7	9	-	5	25

注

^{注1} ホイサラ寺院では、寺院外壁や拝殿内部に設けられたニッチ内に神像をまつることがあるが、本稿では祠堂内部にまつられた神格について論ずる。

^{注2} syncretic templeのこと多神格をまつる寺院をいうが、本稿ではシヴァ神、ヴィシュヌ神、スーリヤ神等の宗派の異なる神格がまつられた寺院を指し、複数の神格をまつるがそれらがヴィシュヌ神のアヴァターラ（後述）のみの場合や、ジャイナ教のティールタンカナ（後述）のみの場合は含めない。

^{注3} Del Bonta, Robert John, *The Hoysala Style: Architectural Development and Artists, 12th and 13th Centuries A.D.*, The University of Michigan, Ph D. Dissertation 1978, pp. 237-247.

^{注4} Setter, S., *The Hoysala Temples*, 1992, Bangalore, pp. 184-197.

^{注5} *Annual Reports of the Mysore Archaeological Department*, 1906 - 1947-56, Bangalore.

^{注6} Setter, *op cit.*, pp. 351 - 367.

^{注7} ボルティコの手前にマハーマンドバ（広間）、ナンディー堂（シヴァ神の乗物である牡牛をまつる小祠堂でガルバグリハとは区別して考えられている）が配置されることがあるが、本稿では特に本殿入口とガルバグリハの位置に着目するため、これらのすべてについては触れない。

^{注8} 拙稿「南インド・ホイサラ朝の建築空間—寺院空間の構成と変遷」、上野邦一、片木篤編、「建築史の想像力」、1996、学芸出版社、pp.194-212.

^{注9} Collyer, Kelleeson, *The Hoysala Artists, Their Identity and Styles*, 1990, Mysore, pp. 19-20.

^{注10} Ramaswamy, K. T., "Sri Vaisnavism in Hoysala Period", Ed. Sheik Ali, A., *The Hoysala Dynasty*, 1972, Mysore, pp.307-308.

^{注11} ラーマヌジャについては、Bhandarkar, R. G., *Vaisnavism, Saivism*

表 VIII. ヴィシュヌ寺院にまつられた神格

	寺院名	所在地	神格 (左)	神格 (中央)	神格 (右)	出典
二軸対称	チェンナケーシャヴァ	ペールール		ケーシャヴァ (西)		MAR 1931 pp.26-46.
	キールティナラーヤナ	タラカード		キールティナラーヤナ (西)		MAR 1932 pp.3-7.
	チェンナケーシャヴァ	カイダラ		ケーシャヴァ (東)		MAR 1927 p.5.
	ケーシャヴァ	イェーランパラシ	ヴェヌゴーパーラ (南)	ケーシャヴァ (西)	ラクシュミーナラシンハ (北)	MAR 1942 pp.58-59.
	チェンナケーシャヴァ	アラケーレー	ヴェヌゴーパーラ (南)	ケーシャヴァ (西)	ラクシュミーナラシンハ (北)	ASMAR III P.92.
	ラクシュミーナラーヤナ	アダダール	ヴェヌゴーパーラ (南)	ラクシュミーナラーヤナ (西)	サラスヴァティ (北)	MAR 1942 pp.37-39.
	ナラーヤナ*	アーネーカンナンパディ	ヴェヌゴーパーラ (南)	ケーシャヴァ (西)	ナラシンハ (北)	MAR 1930 pp.3-4.
	サウムヤケーシャヴァ	ナーガマンガラ	ヴェヌゴーパーラ (南)	ケーシャヴァ (西)	ラクシュミーナラシンハ (北)	MAR 1934 pp.31-36.
	ラクシュミーカント	ヘーダタレー	ヴェヌゴーパーラ (南)	ラクシュミーカント (西)	ラクシュミーナラシンハ (北)	MAR 1918 pp.25-26.
	ラクシュミーナラシンハ*	ハルナハリ	ヴェヌゴーパーラ (南)	ケーシャヴァ (西)	ラクシュミーナラシンハ (北)	MAR 1933 pp.52-61.
	ラクシュミーナラーヤナ	ホーサホーラル	ヴェヌゴーパーラ (南)	ラクシュミーナラーヤナ (西)	ラクシュミーナラシンハ (北)	MAR 1933 pp.3-13.
	ラクシュミーナラシンハ*	ヌッギーハハリ	ヴェヌゴーパーラ (南)	ケーシャヴァ (西)	ラクシュミーナラシンハ (北)	MAR 1933 pp.20-30.
	ラクシュミーナラシンハ*	ジャークアガル	ヴェヌゴーパーラ (南)	シュリダール (西)	ラクシュミーナラシンハ (北)	MAR 1933 pp.71-80.
	ヨーガマハーデーヴァ	セツティケーレー	ヴェヌゴーパーラ (南)	ヨーガマダヴァ (西)	ラクシュミーナラシンハ (北)	MAR 1934 p.24.
	マダヴァラヤ	ペールール (マンドゥヤ)	ヴェヌゴーパーラ (南)	マダヴァ (西)	ジャナルダナ (北)	MAR 1939 pp.32-33.
	ゴーパーラスワミー*	ノナミナケーレー	ヴェヌゴーパーラ (南)	ジャナルダナ (西)	ヨーガナラシンハ (北)	MAR 1939 pp.58-59.
	チェンナケーシャヴァ	ソーマナタブラ	ヴェヌゴーパーラ (南)	ケーシャヴァ (西)	ジャナルダナ (北)	MAR 1932 pp.16-39.
	ラクシュミーナラシンハ	パドラヴァティ	ヴェヌゴーパーラ (南)	ナラシンハ (西)	ヴィシュヌブルショッタマ (北)	MAR 1931 p.3.
	ラクシュミーナラシンハ*	ホーレ・ナラシンプラ	ヴェヌゴーパーラ (南)	ナラーヤナ (西)	ラクシュミーナラシンハ (北)	MAR 1933 p.35-36.
非対称	ヴィーラナラーヤナ	ヴェーラヴァーディ	ヴェヌゴーパーラ (南)	ナラーヤナ (西)	ラクシュミーナラシンハ (北)	MAR 1933 pp.80-90.
	ラクシュミーナラシンハ*	ヴィダナサンテー	ヴェヌゴーパーラ (東)	ケーシャヴァ (南)	ラクシュミーナラシンハ (西)	MAR 1939 pp.64-66.
	チェンナケーシャヴァ	グラマ		ケーシャヴァ (西)		MAR 1939 p.81.
	ラーマナーダ	ペールール (コーラール)		ヴァラダラジャ (西)		MAR 1941 p.69.
	ジャナルダナ	パルヤ		ジャナルダナ (西)		MAR 1942 p.19.
	ナラシンハ	クニガル		ナラシンハ (西)		MAR 1938 p.13.
	ヨーガナラシンハ	ナラシンプラ		ヨーガナラシンハ (西)	ヴィシュヌ (南)	MAR 1947-56 pp.37-38.
	カップーチェーニガラヤ	ペールール	ラクシュミーナラーヤナ (南)	カップーチェーニガラヤ (西)		Narasimhachar pp.15-16.

(注) 「寺院名」の欄の「*」は、中央のヴィシュヌ・ムールティの名称が寺院の名称になっていないものを示す。「出典」欄の「E.C.」は、*Epigraphia Carnatica*, Bangalore, 1923 (reviced edition)を、「MAR」は、*Annual Reports of Mysore Archaeological Department*とその発行年を、「Narasimhachar」は、Narasimhachar, R., *The Kesava temple at Belur*, 1911, reprint, New Delhi, 1982.を、「ASMAR III」は、Setter, S.(Ed.), *Mysore Archaeological Department, Annual Reports : 1910-1911 vol.III*, Karnatak University, Dharwar, 1976.を、「Rea」は、Rea, A., *Chalukyan Architecture : including examples from the Ballari District*, Madras Presidency, reprint 1970, Delhi.を指す。本表は表Ⅲの二軸対称、非対称の寺院を詳細に記したもので、二重実線は表Ⅲの実線に対応し、同順で表記している。表Ⅳも同様に表Ⅳを詳細に記したものである。

and Minor Religious Systems, 1965, Delhi, pp.50-57.を参照。

^{注12} Bhandarkarが1098A.D.にビッティ・デーヴァが改宗したとしているのに対し (Bhandarkar, *ibid.*, p. 52.), ラーマヌジャがホイサラ領に逃れてきた時期を, Ramaswamyは1096A.D. (Ramaswamy, *op cit.*, p. 306.), Collyerは1104または1108A.D.から1117A.D.の間であるとしており (Collyer, *op cit.*, p. 21.), 年代については定説がない。

^{注13} Collyer, *op cit.*, p. 19.

^{注14} Collyer, *op cit.*, pp. 59-64.

^{注15} 数が限られるが, ジャイナ教徒でシヴァ派の寺院に名を残す例もみられる。Collyer, *op cit.*, p. 63.

^{注16} 例えばヴィシュヌヴァルダナ (在位 1108-42A.D.) はペールールのチェンナケーシャヴァ寺院等のヴィシュヌ派の寺院を建立する一方で, ホイサラ朝最大のシヴァ寺院であるハレービードのホイサレーシュヴァラ寺院も建立し, さらに臣下がジャイナ教寺院を建立する際にも助成している。Setter, *op cit.*, pp. 47, 50, 59.

^{注17} バイラヴァをまつる, バイラヴァナグッダのバイラヴァ寺院 (MAR 1947-56 p. 39.) と, ヴィーラパドラをまつる, ハレービードのヴィーラパドラ寺院 (Fockema, Gerard, *Hoysala Architecture, medieval temples of southern Karnataka built during the Hoysala rule*, 1994, New Delhi, pp. 141-142.), ケーレーサンテーのヴィーラパドラ寺院 (MAR1945 pp. 69-70.) の合計3基。

^{注18} 例えば, アラシーケーレーのイーシュヴァラ寺院にまつられるリングは「イーシュヴァラ・リング」とよばれるが, 図像的に他のリングと大差はない。(MAR 1930 pp. 61-67.)

^{注19} MAR 1928 p.4.

^{注20} MAR 1933 pp. 61-66.

^{注21} MAR 1934 pp. 24-28.

^{注22} MAR 1917 pp. 11-12.

^{注23} MAR 1917 pp. 17-18.

^{注24} ゴーパーラハリハのゴーパーラクリシュナ寺院 (MAR 1947-56 pp. 43-44.) と, テーラカナンビのゴーパーラスワミー寺院 (MAR 1937 pp. 24-25.) の二基。

^{注25} 表Ⅶの「寺院名」欄で*で示した寺院は, 入口右側のヴィシュヌ・ムールティの名前, もしくはノナミナケーレーのゴーパーラスワミー寺院 (MAR 1939 pp.58-59.) のように本殿入口左側のゴーパーラの名前で呼ばれる寺院であるが, その理由は分っていない。

^{注26} MAR 1942 pp. 37-39.

^{注27} 表Ⅶに示すようにヴィシュヌ寺院にまつられた神格はすべて異なることがほとんどであるが, 中央のガルバグリハに主神がまつられ, それ以外のガルバグリハにまつられる神格は副神として対称性を論じる。

^{注28} MAR 1947-56 pp. 37-38.

^{注29} この寺院ではナヴァランガの西側に本尊であるヨーガナラシンハをまつる。南側のガルバグリハは破損が激しく偶像は現存しないが, 寺院内に残る彫像がヴィシュヌ神に関するものばかりであるので, ここにまつられた神格はヴィシュヌ神であろうと考えられる。(MAR 1947-56 pp. 37-38.)

^{注30} MAR 1933 pp. 80-90.

^{注31} 刻文が崩壊しているため建立年代は明らかではないが, ナヴァランガの西側に位置するガルバグリハ上方のシカラ (塔状構造物) と, マハーマンガバの南, 北側に位置するガルバグリハ上のシカラとではデザインが異なっており, 二期にわたって建立されたものであると考えられる。

^{注32} この寺院ではナヴァランガの西側の壁に格子窓が設けられており, この窓のすぐ西側にヴィシュヌ神の乗物であるガルーダをまつる小祠堂が位置している。MAR 1925 p. 5.

^{注33} ハリハラハリハレーシュヴァラ寺院 (MAR 1937 pp. 71-72.), ハリハラブラハリハレーシュヴァラ寺院 (MAR 1942 pp. 25-26.) では, 主ガルバグリハにハリハラ神をまつる。ハリハラ神は, シヴァ神, ヴィシュヌ神が一体化した神格であり, これ自体重層信仰を具現化したものである。

^{注34} バンチャヤターナとはヒンドゥー教の儀式の時に用いられる神格のバ

表 IX. 重層信仰寺院にまつられた神格

	寺院名	所在地	神格 (右)	神格 (中央)	神格 (左)	出典
二軸対称	ソーメーシュヴァラ	ストウール	シャンカラ・ナーラーヤナ (南)	リング (西)	チャームダ (北)	MAR 1944 p.20.
	マハーリングーシュヴァラ	マーヴタナハリ	ハリハラ (南)	リング (西)	ウグラ・ナラシンハ (北)	ASMAR III p.93-95.
	マツリカルジュナ	バスラール	ヴェーヌゴバーラ (南)	リング (西)	アマラナーラーヤナ (北)	MAR 1934 pp.36-47.
	チャームンデーシュヴァリ	ウンディゲーナハル	チャームンデーシュヴァリ (南)	リング (西)	ケーシャヴァ (北)	MAR 1930 p.6-7.
	シッデーシュヴァラ	ニールグンダ	ヴェーヌゴバーラ (南)	リング (西)	チェンナケーシャヴァ (北)	MAR 1947-56 p.34.
	ハリハレーシュヴァラ	ハリハラブラ	ザラスヴァティ (南)	ハリハラ (西)	アーナンタパドマナーバ (北)	MAR 1942 pp.25-26.
	トリムールティ	バンダニケー	リング (南)	リング (西)	ケーシャヴァ (北)	MAR 1941 pp.93-94.
	ムレーシングーシュヴァラ	ペーッルール (マンドゥヤ)	ヴェーヌゴバーラ (南)	リング (西)	ラクシュミーナーラーヤナ (北)	MAR 1939 p.35.
	カッレーシュヴァラ	バランギ	ヴィシュヌ (西)	リング (北)	スーリヤ (東)	MAR 1941 p.101.
	ブーチェシュヴァラ	コーラヴァンガラ	リング (西)		スーリヤ (東)	MAR 1933 pp.45-52.
	ハリハレーシュヴァラ	ハリハラ		ハリハラ (西)	カーバイラヴァ (北)	MAR 1937 pp.71-72.
	ラクシュミーデーヴィ	ドゥッダガッダヴァリ	ラクシュミー (東)	ヴィシュヌ (南), カリー (北)	リング (西)	MAR 1933 pp.93-97.
	シッデーシュヴァラ, チェンナケーシャヴァ	マラレー	リング (シッデーシュヴァラ寺院), ケーシャヴァ (チェンナケーシャヴァ寺院)			MAR 1936 pp.19-23.
並置	ナーゲシュヴァラ, チェンナケーシャヴァ	モーサレー	リング (ナーゲシュヴァラ寺院), ケーシャヴァ (チェンナケーシャヴァ寺院)			MAR 1933 pp.36-45.
非対称	カンヴェーシュヴァラ	ペーッルール (コーラール)	リング (西)	不明 (北)		MAR 1941 pp.67-69.
	パッレーシュヴァラ	カルケーレー	リング (西)	不明 (北)		MAR 1945 p.41.
	シンゲシュヴァラ	ムドゥッケーレー	リング (西)	ハリハラ (北)		MAR 1942 p.62.
	ドヴィクター	ケーレーサンター	リング (西)	ヴィシュヌ (北)		MAR 1945p.74.
	ベッテーシュヴァラ	アグラハール・ベルグディ	リング (西)	ケーシャヴァ (北)		MAR 1939 pp.68-71.
	ジャガテーシュヴァラ (イーシュヴァラ)	アーネーコング	リング (西)	ヴィシュヌ (北)		MAR 1932 pp.54-56.
	ラーメーシュヴァラ	ベンデーケーレー	リング (西)	ヴィシュヌ (北)		ASMAR III p.92.
	ラーメーシュヴァラ	アラケーレー	リング (西)	ヴィシュヌ (北)		ASMAR III p.92.
	カッレーシュヴァラ	カンナガラ	リング (西)	女神/敬造 (北)		MAR 1926 pp.2-3.
	イーシュヴァラ	ナルクンダ	リング (西)	ケーシャヴァ (北)	不明 (東)	MAR 1939 p.87.
	ルドレーシュヴァラ	ハレービード	リング (西)	リング (北)	ヴィーラバドラ (東)	現地調査による
	マツリカルジュナ	ホーンナリ	リング (西)	不明 (北)	不明 (東)	MAR 1937 p.62.
	アムリタリンガ・マニケーシュヴァラ	ナンディターヴァレー	リング (西)	ケーシャヴァ (北)	リング (東)	MAR 1937 p.64.
	シャンブリンゲシュヴァラ	ケーレーサンター	リング (西)	ヴェーヌゴバーラ/敬造 (北)	不明 (東)	MAR 1945 pp.72-74.
	ソーメーシュヴァラ	カバリ	リング (西)	ジャナルダナ (北)	スーリヤ (東)	MAR 1926 pp.5-6.
	カッルマタ	チャンナギリ	リング (西)	ヴィシュヌ (北)	ナンディー (東)	MAR 1937 p.56.
	ケーテーシュヴァラ	チャンナギリ	リング (西)	ケーシャヴァ (北)	ナンディー (東)	MAR 1937 pp.54-55.
	トリムールティ (ヴィーラバドラ)	アーサンディ	リング (西)	不明 (北)	不明 (東)	MAR 1942 pp.67-69.
	カッレーシュヴァラ	マララケーレー	リング (西)	ジャナルダナ (北)	スーリヤ (東)	MAR 1939 p.89.
	シッデーシュヴァラ	アナゴドゥ	リング (西)	ヴィシュヌ (北)	スーリヤ (東)	MAR 1939 p.95.
	マツリカルジュナ	サーガリ	リング (西)	ハリハラ (北)	リング (東)	MAR 1939 p.90.
	コーディ・バサヴァンナ	バーダ	リング (西)	ケーシャヴァ (北)	スヴァヤンブー (東)	MAR 1939 p.88.
	チャッテーシュヴァラ	チャトチャトハリ	リング (西)	ケーシャヴァ (北)	スーリヤ (東)	MAR 1933 pp.90-92.
	ヴェーヌゴバーラ	マーガラ	リング (西)	ブラフマー (北)	ヴィシュヌ (東)	Rea pp.10-14.
	コーディ・カッレーシュヴァラ	ローキケーレー	リング (西)	不明 (北)	スーリヤ (東)	MAR 1939 p.91.

ンテオンを指し、ガネーシャ神、マヒシャスラマルディニ神、シヴァ神、ヴィシュヌ神、スーリヤ神の五つの神格で構成される。

^{注35} MAR 1933 pp. 45-52.

^{注36} MAR 1937 pp. 71-72.

^{注37} MAR 1933 pp. 93-97. この寺院には、シヴァ神、ヴィシュヌ神以外の神格、ラクシュミー神が主神としてまつられる。さらにラクシュミー神をまつるガルバグリハも入口の方からみて正面に位置するわけではなく極めて例外的である。

^{注38} MAR 1933 pp. 36-45.

^{注39} MAR 1936 pp. 19-23.

^{注40} MAR 1933 p. 37.

^{注41} MAR 1945 pp. 72-74.

^{注42} ナヴァランガ東側のマハーマンダバはその他の建物よりも遅れて建設された。ガルバグリハ上のシカラがヴィジャヤナガラ朝の時代に再建されていることは明らかであるが、マハーマンダバの建立された時期は明らかではない。MAR 1929 pp. 9-10, MAR 1939 pp. 68-71.

^{注43} チャンナギリのカッルマタ寺院、ケーテーシュヴァラ寺院では、ナヴァランガの東側の祠堂にナンディーがまつられる (表IX)。ナンディーはシヴァ神の乗物の牡牛で、シヴァ神、ヴィシュヌ神等の神格とは区別されるが、寺

院の平面は三つの異なる神格をまつるケーレーサンターのシャンブリンゲシュヴァラ寺院 (図11) と大差ない。

^{注44} Setter, S., *op cit.*, p. 186.

^{注45} 寺院の名称は、本尊または寺院を建立したパトロにちなんで命名されるが (Patil, Channabasappa S., *Temples of Raichur and Bellary Districts, Karnataka, 1000-1325 A.D.*, pp.21-23参照), シヴァ神を意味するイーシュヴァラ (Isvara) が語尾につく名称はシヴァ寺院と見てさしつかえない。

^{注46} MAR 1932 pp. 16-17.

^{注47} ヴィシュヌ寺院にケーシャヴァ等が多くまつられる理由については、当時のヴィシュヌ派の文献によって確かめる必要がある。

^{注48} ダンバルのドゥッダバサッパ寺院 (Cousens, Henry, *The Chalukyan Architecture of the Kanarese Districts*, Calcutta, 1926, pp.114-115, pl. CXXV.), ガダグのソーメーシュヴァラ寺院 (Cousens, *ibid.*, pp. 112-113, pl. CXXI.) など11世紀後半以降、後期チャールキヤ朝のもとで中カルナタカに非対称平面の寺院が建立されている。非対称平面がカルナタカの地域的特徴であるのかどうか、ホイサラ寺院との影響関係についてはさらに考察を深める必要がある。

(1997年10月10日原稿受理, 1998年3月16日採用決定)